

# 『だれかの笑顔のために』

## 平和について考える

2024年のノーベル平和賞は、被爆者の立場から核兵器廃絶を訴えてきた日本被団協＝日本原水爆被害者団体協議会が受賞しました。核兵器のない世界を実現するための努力と核兵器が二度と使用されてはならないことを証言によって示してきたことが受賞理由となっています。過去の戦争によって、多くの人々の命が奪われました。軍人ばかりでなく、子どもやお年寄りなど民間人も数多く殺されたのです。そして今も、その悲劇が繰り返されています。人としての幸福や生きる権利を無理矢理奪われている現実があります。まさしく「戦争以上の人権侵害はない」のです。6年生は、長崎への修学旅行を「平和」について考える機会としてほしいと考えています。



2016年、アメリカのオバマ大統領が現職大統領としてはじめて被爆地・広島を訪問されたときの出来事が忘れられません。その時のことを記した新聞記事を紹介しします。



2016年5月27日、オバマ大統領が、現職米大統領としてはじめて被爆地・広島を訪問した。

平和祈念資料館を見学した後に原爆死没者慰霊碑に献花。当初の予定では数分と言われていたにもかかわらず、17分にわたってのスピーチ。そして被爆者の森重昭さんをしっかりと抱き寄せたシーンは、多くの人々の印象に残っていることだろう。

広島原爆慰霊碑前でオバマ米大統領と対話した被爆者で歴史研究家の森重昭さん（当時79）は約40年にわたり、被爆死した米兵捕虜について調査を続けてきた民間研究者だ。「原爆の犠牲者に国籍は関係ない」との強い思いから、国内外の資料をもとに被爆死した12人の米兵の存在を特定。原爆による死没者として広島市の名簿に登録された。

森さんは、オバマ氏から「長期にわたり多くの米兵の調査をしていただいた」とねぎらいの言葉をかけられ、「被爆死した12人の米兵も天国できっと喜んでいる」と伝えたという。オバマ氏と抱き合った森さんの目には涙が浮かんだ。

今回のメディアでは「8歳で被爆」という情報以外はあまり多く語られなかった森さんだが、被爆死した米兵捕虜についての当時の記録や関係者の証言を、自力で40年以上丁寧に集め続け、アメリカにある彼らの遺族に情報を伝えるという活動をされてきた。

原爆投下前の1945年7月末、呉市付近で日本の巡洋艦を爆撃中に撃墜され、生き残った米軍機の乗員が拘束され捕虜になった。そして同年、8月6日朝8時15分。米兵捕虜が拘留されていた憲兵隊司令部は、爆心地から400メートルも離れていなかった。捕虜になった米兵らは日本の地で、自分の味方である米軍からの原爆投下により命を落としたのである。

そのことを知った森さんは、会社勤めをしながらひたすらに調査に打ち込んだ。森さんが調査を始めたのは38歳の時。1970年代の事である。亡くなった米兵捕虜の名前も、正確な人数もわからない。今の様にネットが普及している時代とは違い、戦争の混乱や原爆投下での資料の消滅など、情報を探すだけでも簡単な事ではなかった。

日本政府にはおざなりな対応をされ、まわりの人からは「なぜ奴らの事を助ける？」とまるで非国民の

ような非難を受ける事も少なくなかった。自身や家族が被爆し、まだアメリカへの憤りを感じている人も多い中、それでも森さんは、定年まで会社勤めを続けながら、週末になると調査を続けた。

8歳で被爆した森さんは、「以前は（米国を）恨んでいたかもしれない」と取材に答えた。きのこ雲の空から人間の首が落ちてくるのを見た。おばは、いとこの目の前で生きたまま焼かれ、断末魔の声を上げたという。ただ「被爆で行方が分からなくなったままの子どもを弔う大勢の親の姿が忘れられない」と森さん。会社勤めの傍ら調査に打ち込む夫を支えてきた妻の佳代子さんは、「残された者の痛みに敵も味方もない。そういう気持ちだったと思います。」と説明する。

米兵捕虜の家族は、戦後の混乱の中で「行方不明」と伝えられていた。家族が何度問い合わせても、はっきりとした答えを得ることはできなかった。米政府が米兵捕虜が広島で犠牲になった事を認めたのは、なんと1983年になってからである。

森さんは、まず亡くなった米兵のフルネームを入手する事、そしてその米兵捕虜と同姓の米国人を探すことから始めた。電話をかけ、手紙を書き、一人一人に確認をとって遺族を探そうとしたのである。「しかし、調査は簡単ではありませんでした。私は、心臓が悪くて現地に行くことができず、米国は50州もあり、数千万もの人が住んでいるのですから」

あの広大な国の中で、同じ姓の人を探して家族にたどり着こうだなんて、まるで砂漠に落ちている砂金を探すようなもの。誰もが「不可能だ」と考えたのも無理はない。国際電話の通話代が、月に7万円を超える日もあったとのこと。

爆心地からわずか2.5キロメートルの小学校で被爆した森さん、爆風で飛ばされ気がついたらきのこ雲の中にいたといいます。自分が助かったのは奇跡だ、だからこそ自分がこれをやらなくては。「せめて遺族にだけは伝えたい。ただただその一心でした」「誰にも言われたわけでもないし、誰も手伝ってくれなかった。みんな上手くいかないと思っていたけれども、私は何としてもやり遂げようと思っていました」

その頃、広島には多くの慰霊碑があったが、まだ亡くなった米兵捕虜のためのものは一つもなかった。自分が死ぬまでに、なんとか遺族の方を探し、亡くなった米兵捕虜の写真と名前を平和祈念資料館に原爆犠牲者として登録しようと決心した森さん。しかし、調査は何度も行き詰まった。森さんは当時の事を「真っ暗な中で、小さな光を探し求めている様だった」と語っている。それでも、森さんは諦めなかった。まるで雲をつかむ様な話だと思われていた森さんの活動ですが、少しずつ森さんの努力は報われ始め、米国州立国会図書館の資料を入手することができ、その膨大な資料の中から何人かの米兵捕虜を探し出すこともできた。



そうして決して諦めずコツコツと調査を続けた結果、2009年、ついに最後の一人である12人目の米兵捕虜の存在を特定し、すべての遺族を探し出すことができたのだ。遺族の方たちは、この森さんの活動により、長い間抱えていた、行き場のない悲しみを乗り越える事ができた。

「これでやっと前に進むことができる」と感謝のこぼれを伝える遺族たちも多くいた。森さんは「オバマ氏の広島訪問で、核なき世界への一歩になればいい」と期待を込めた。

【参照：毎日新聞記事】

自らも被爆しながら、その原爆を落とした国の兵士の遺族探しのために自らの一生をかけてきた森さんの生き方に頭が下がります。

テレビのインタビューに答えられた森さんのことばが印象に残っています。

**「互いにこれを（憎しみを）乗り越えなければ平和はない。」**